



日常業務にひそむリスクとその対策

昭和大学病院

ベッドサイドで測定した血糖値などを電子カルテに入力するとき、誤った値が入力されたり、入力自体をうっかり忘れてしまうというインシデントが発生する可能性がある。昭和大学病院では、電子カルテ連動のバイタルサイン測定機器システムを導入することにより、未入力や誤入力のリスク軽減に取り組んでいる。導入の経緯や効果について紹介する。

未入力や誤入力などのリスクを軽減する バイタルサイン・血糖値 測定機器システムを導入

正確なデータを
タイムリーに共有できることが
大きなメリット

昭和大学病院は、2018年1月、バイタルサインの未入力や誤入力、タイムラグのリスク軽減に寄与する「HRジョイント」というシステムを導入した。「HRジョイント」は、テルモが開発した電子カルテ連動のバイタルサイン・血糖値測定機器システムである。

看護部次長の田口美保さんは、「当院では2018年1月1日に電子カルテを導入したことに伴い、バイタルサインや血糖値の未入力や誤入力を防ぐシステムの導入を検討しました」と言う。

HRジョイントは測定値がタッチ入力でも電子カルテに転送されるので、未入力や誤入力といったリスクを軽減することができる。

「記録が正確なので、医療安全も担保できます。未入力や誤入力といったインシ

デントは看護師のストレスにもなりますから、看護業務の改善にもつながると感じました」と話す。

現在、HRジョイントの効果などを評価するため、バイタルサインと血糖値の入力頻度の高い4病棟(循環器内科、消化器内科、腎臓内科、糖尿病内科)で使用している。

「腎臓内科病棟の場合、病棟から透析室に行く患者さんが多くいますが、透析室のスタッフは、その日の血圧や血糖値のデータをできるだけ早く把握したいと思っています。HRジョイントの場合、正しい数値がすぐに電子カルテに反映されるので、院内の即時共有というメリットがあります」

従来は、透析室に向かう患者さんとともに送られるデータを待って透析の準備を始めていたが、腎臓内科病棟にHRジョイントが導入されてからは電子カルテをみるだけで透析の準備を始めることができるようになったという。

また、糖尿病患者の治療やケアにもメ

リットが生じている。

「糖尿病内科の医師は全病棟の併診も行っていますが、血糖値も電子カルテの血糖管理表にすぐに反映されますし、測定時間も正確に表示されるので、タイムリーにコンサルテーションや指示が出せるというメリットがあります」

併診とは、糖尿病以外の疾患の治療を目的に入院した患者でも、糖尿病・耐糖能異常が明らかであり、それが原疾患治療に影響を与える患者さんに対し複数の科が共同で診療に当たることである。

病棟では患者さんのケアや処置が優先



看護部次長の田口美保さん。「HRジョイントは測定値がタッチ入力でも転送されるので記録が正確です。未入力や誤入力などのインシデントが減ると看護師のストレスも軽減でき、看護業務の改善につながります」



消化器内科病棟師長の井口佳子さん(脳卒中リハビリテーション看護認定看護師)。「HRジョイントを有効活用することで、患者さんとのコミュニケーションを充実させ、信頼関係を築いていきたいと思えます」



消化器内科病棟看護係長の與那覇香苗さん。「測定機器を読み取りリーダーに乗せるだけで測定値が電子カルテに送信されるので、画面ではなく患者さんの目を見て会話できるのもメリットです」



消化器内科病棟主査の伊藤雄一郎さん。「患者さんのベッドサイドにいられる時間が増えました。従来は測定時間の入力もあやふやでしたが、正確な測定時間が電子カルテに送信されるのでとても安心です」

されるため、データ入力はどうしても後まわしになってしまい、情報共有が遅くなってしまうタイムラグが生じる。HRジョイントは、病院全体のデータ即時共有というメリットが大きい。

とくに糖尿病患者さんの併診を行って

いる大病院では、血糖値を院内で即時共有することは有意義である。

14階病棟師長の井口佳子さんは、「実際に病棟で使用している看護師の評価を聞くと、ほとんどの看護師が『正確な情報をタイムリーに共有できるので利便性がよ

い』と答えています」と言う。

ただ井口さんは、いまだに手入力を行っている看護師が見受けられることに対して、「看護師によっては自分のやり方を変えたくないと思う人もいますが、HRジョイントの正確性や効率性を病棟全体でもっと共有し、有意義に使用していきたいと思います」と話す。



血糖測定機器(メディセーフフィットスマイル)を使って血糖値を測定



血糖測定機器(メディセーフフィットスマイル)を読み取りリーダー(PaSoRi®)にタッチすると、瞬時に測定値を自動的に読み取り、電子カルテに送信される

短縮した入力時間を
ベッドサイドケアにあてることで
患者との信頼関係を築く

同院では、2018年10月10日、バイタルラウンド時の体温、血圧、SpO₂の測定および電子カルテ入力にかかる時間を測定した(途中でケアなどが実施された場合は、その時間を除き、バイタルサイン計測入力にかかる時間のみを測定)。

「手入力時」と「HRジョイント使用時」にてそれぞれ5名の看護師で実測したところ、手入力は平均2分9秒、HRジョイントは平均1分47秒と「22秒の差」が生じたという。

通信機能付の測定機器



メディセーフフィットスマイル®



テルモ電子体温計C215



テルモパルスオキシメータファインパルス®SP



テルモ電子血圧計H56D(通信タイプ)



血糖値などの測定値が測定した日時とともに電子カルテに正確に送信される

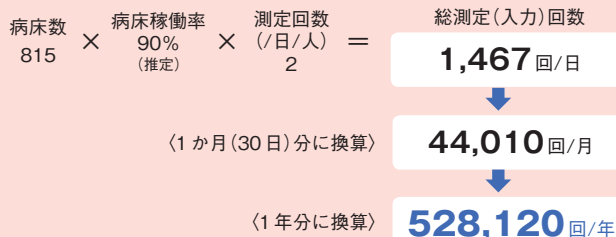
PaSoRi(パソリ)はソニー株式会社の登録商標です

●昭和大病院におけるHRジョイントによる測定時間の短縮

手入力とHRジョイントの電子カルテ入力時間をそれぞれ5名の看護師で実測・比較してみました

入力方法	平均入力時間
手入力	2分9秒
HRジョイント	1分47秒

22秒



22秒 × 528,120回 = 11,618,640秒 → 3,227時間

↓

134日分

2018年10月10日の昭和大病院の実態調査より

「看護師には、この22秒を患者さんとのコミュニケーションなどに使ってほしいと感じました。患者さんのADLや残存機能などをアセスメントしたり、退院に向けたさまざまな相談などに使うことができれば、ベッドサイドケアも充実し仕事にやりがいを感じることができると思います」と田口さん。

実際に病棟で使用している消化器内科

病棟看護係長の與那覇香苗さんも、「測定機器を読取りリーダーに乗せるだけで測定値が電子カルテに送信されるので、電子カルテの画面ではなく患者さんの目をみて会話できるのも大きなメリットです。それに22秒がプラスされるので大きな違いだと実感しています」と言う。

消化器内科病棟主査の伊藤雄一郎さんも同様に、「電子カルテのほうを向いて入

力すると患者さんとの会話も途切れていましたが、HRジョイントになって患者さんのほうを向いて入力できるので会話時間も増えたと思います」と話す。

井口さんは、「電子カルテになると、患者さんから『医師や看護師はパソコンの画面ばかりみていてこっちを向いてくれない』というクレームを聞くことがありますから、看護師が患者さんの目をみて話すことは患者さんの安心感につながると思います」と言う。

HRジョイントを有効活用することで、患者さんとのコミュニケーションを充実させ信頼関係を築いていくというメリットを生かしたいということだ。



昭和大病院では、HRジョイント導入のメリットをより活かすため、今後もさまざまな視点から評価を続け、導入病棟も増やしていきたいという。

なお、HRジョイントを販売するテルモでは、このシステムを在宅でも活用できるように検討している。また、医療機器の適正使用をはかるため、医療機関の要望などに応じてアレンジ可能なT-PAS研修*の提案、実施を行っている。



看護部長 城所扶美子さん



看護業務の効率化とデータの即時共有により
チーム医療に貢献したい

HRジョイント導入の目的は、データ入力の正確化と看護業務の効率化です。

バイタルサインなどのデータは看護師だけでなく医師をはじめとした多職種が共有するものなので、正確なデータが医療安全を担保するだけでなく、即時に共有できれば患者さんのメリットも大きくなります。

また、看護師自身の誤入力や未入力に対するストレス軽減にもつながるのではないかと期待しています。急性期の臨床現場で働く看護師は「多重課題」などにより非常に繁忙なので、すこしでも業務が改善され

ることによって、看護の質向上と現実とのジレンマに陥る看護師の手助けになるのではないかと期待しています。

今回の実測調査では1回の測定時間の差は22秒という結果でしたが、それが積み重なれば大きな時間差になります。その時間を本来の看護師の仕事に使い、患者さんの療養に還元できることを願っています。そのためにも、より使いやすく信頼できるシステムに改善する努力を継続していきたいと思っています。

*T-PAS研修：テルモの汎用医療機器(シリンジや輸液セットなど)による事故を防ぐために、添付文書に記載された注意事項のうち、発生する頻度や危険度が高いものを体験して理解する教育プログラム。詳細については、テルモ株式会社にお問い合わせください。